平成 22 年度　8020 公募研究報告書抄録

研究課題：終末期における歯科医療の在り方に関する検討
～経口摂取が困難な患者の病態と歯科医療の介入の必要性とその内容の検討～

研究者名：藤本篤士[1)]，武井典子[2)]，竹中彰治[3)]，福島正義[3)]，石井孝典[2)]，
高田康二[2)]，岩久正明[4)]
研究協力者：女池由紀子[1)]，木本恵美子[1)]，加藤那奈[1)]，向井明寿香[1)]
所　　属：[1)]医療法人渓仁会札幌西円山病院歯科診療部，
[2)]公財）ライオン歯科衛生研究所，[3)]新潟大学，[4)]日本歯科大学

終末期における病院および在宅での歯科医療の必要性を確認して広く国民に発信することを目的に，終末期医療に深く関わっている札幌西円山病院の職員を対象に非経口栄養患者の歯科的問題に対する意識調査を行った．

調査対象者は，札幌西円山病院の職員（医師，看護師，介護職）403 名で 360 名（回収率 89.3%）から回答を得た．調査内容は，口腔状態に関する 28 項目（歯：5 項目，義歯：5 項目，粘膜：6 項目，口腔乾燥：2 項目，口腔機能：10 項目）で，それぞれ①臨床で見る頻度，②日常生活上の問題の程度（意識），③歯科介入の必要性について 0ー4 点で点数化した．また，非経口栄養患者の口腔ケア時に関する 15 項目についても①と②について同様に調査した．統計的分析は介護病棟，療養病棟および障害者施設の３つの病棟別および医師，看護師および介護職（介護福祉士，ケアワーカー）の３つの職種別についてそれぞれ行った．

その結果，義歯の問題，口腔乾燥，咀嚼嚥下機能低下，誤嚥などが「臨床で見る頻度」が高いにもかかわらず，それらに対する「問題意識」と「歯科介入の必要性」の意識はそれほど高くなかった．病棟別では療養病棟および障害者施設は「臨床で見る頻度」と「問題意識」が高かったが，「歯科介入の必要性」は口腔乾燥，開口障害，顎関節脱臼，咬傷に関してのみ意識が比較的高かった．また，職種別では，介護職が医師と看護師に比較して「臨床で見る頻度」，「問題意識」および「歯科介入の必要性」のいずれも低かった．一方，口腔ケア時の問題に関しては，病棟別では差がなく，職種別では介護職の「問題意識」が医師と看護師に比較して低かった．

終末期高齢者の多くは精神機能低下，運動機能低下，感覚機能低下などの身体的変化，様々な疾患やそれらの後遺症，褥瘡，排泄や転倒のケアなどが必要といった多くの問題を抱えている．そのような状況下で，医師，看護師，介護職及び関係者の方々の終末期の患者のための多忙な対応の中で，口腔に関する「問題」や「歯科介入の必要性」などについて一層の注目を高めて戴くために，歯科からの今まで以上の適切な情報提供の重要性が明らかにされた．今後，その効率的な方法論のさらなる検討が必要と考えられた．また，これと並行して，症例別対応方法や効果的対応方法，さらには QOL に主眼をおいた対応方法のあり方などについて，これらの職種の方々と広く協力して，詳細な検討を進めていく予定である．